声明と雅楽

羽塚堅子

声明と雅楽に就いては色々と論じたい事があるが、紙数に限りがあるので、その大略を述べて見よう。

一　頼吒和羅伎曲

源信和尚の往生要集上の末に、馬鳴菩薩の頼吒和羅伎の偈文が出ている。その文に曰く、

有為諸法　如幻如化　三界獄縛　無一可楽　王位高顕　勢力自在
無常既至　誰得存者　如空中雲　須臾散滅　是身虚偽　猶如芭蕉
為怨為賊　不可親近　如毒蛇篋　誰当愛楽　是故諸仏　常呵此身

已上十八句。此の文は恐らくは馬鳴菩薩の作であると思はれる。頼吒和羅と言うは比丘の名前であるが、この比丘の事が頼吒和羅経に精しく説かれている。比丘が出家を志しても親が許さぬので、断食をしてその意の堅固なることを示した。親も遂に観念して頼吒和羅に出家を許して釈尊の弟子とした。その経の中に頼吒和羅の説いた長い〳〵偈文があるが、馬鳴が要約して右の如き十八句の文としたものであろう。是れは声明としては伝はつていないが、立派な声明としてその価値は絶大であると思う。この文は伎楽中の声歌であるが、馬鳴が頼吒和羅の顚末を伎楽にして、これを公開演奏したのである。その演奏は実に広大なものであつたと思はれるが、馬鳴の思つた様に音楽が出来なかつたので、馬鳴はたまりかねて、法服を脱ぎ捨て白衣に換えて、自ら五絃の琴を弾じた。この琴の音によつて音楽が整然となつて観衆が非常に感銘を受け、五百の王子が出家したと伝えている。時の王は之に驚き馬鳴の五絃琴を破毀してその音楽を止めて仕舞つたという。この時の伎の声や音楽は如何になつたであろうか。之が私の問題とする処である。楽書に依ると之が林歌の曲であると書いてあるが、之が問題である。普通林歌と言えば唐楽の平調もので、早八拍子・拍子十一である。打物は唐楽の法に依らず高麗楽の延四拍子の法に依ると伝えている。兎も角も是の説に依ると、十八句の偈文と十一拍子との関係がどうなるかと思はれる。洛北大原の経蔵の中でも是の研究の書があ

ると覚えているが、あまり信用は出来ないと思つている。いま一言した打物は高麗楽の延四拍子に依れとある処から推測してみると、抑々唐楽の平調林歌なるものは、高麗楽の改作であると思はれる。高麗楽の林歌は高麗楽の平調であり、これには特殊の舞がある。楽も特殊の旋律をもつている。楽曲は拍子十四であるが、その音調は大体唐楽の音調と同じ様なもので、その調子が異つている。そこで拍子十四の高麗楽を拍子十一の唐楽に改作したものと思はれる。処がさきほども云つた如く、伎の声は十八句であり楽の拍子は十四であるから、その関連がどうなるかゞ問題であるが、偈文は漢音即ち訳文であるが、その原音たる梵音を調べと見たいと思うが、之は私の手ではどうにもならない。専門の学者諸君にお願いしたいのである。処で林歌の舞のことであるが、この舞は私も折々舞うのであるが、この舞い振りが高麗楽の中でも大変異色があり、また拍子のとり方も特異なものである。殊にその装束に至つては他に類例を見ない。特に目を引くのは袍の模様に鼠の縫い文のあることである。この鼠の紋について古来色々の説をなすものがあるが、私はこの鼠が林歌の意を顕はしたものと思う。即ち鼠はねずに見るという意であるから、仏弟子は寝ずに修行をするという意で、これが頼吒和羅の精神が顕はしてあると思う。話は変はるが催馬楽の中に老鼠というがある。古昔は盛に行はれていたと思うが、その楽曲も歌詞も異つていて、頼吒和羅の曲には無関係と思う。西寺の老鼠、衣つんず袈裟つんず、法師に申せ師に申せとある。現在の催馬楽の譜本にはないが、金鼠の装束とは一脈の関係がありはしないかと思う。近来宮内庁の楽部でこの老鼠が再興されたと聞いているが、私はまだ見聞しない。

二　三十二相

この三十二相の声明は大阪天王寺の修正会で勤まる声明で、之に雅楽が合奏されるのである。古来は盛大に行はれたものらしいが、近来は勤まつていない。職衆と伶人と合すると頗る多人数であるから、容易に勤まらないのである。この声明には序・破・急の三段があり、序は清浄慈門の一句七字・四句一偈の伽陀、破は三十二相で烏瑟膩沙の七字一句・計三十二句・一句一相でこの長い偈文に雅楽の散吟打毬楽の合奏、急は我今略讃の七字一句・計八句の伽陀、之に黄鐘調の鳥急を合奏するものである。主点は破の三十二相の偈文と黄鐘調の散吟打毬楽とである。然し散吟打毬楽の楽譜が一般には知られていないので、この両者の合奏は出来ないので、普通は羯鼓・太鼓・鉦鼓の三鼓だけを打ち合せて勤めているので、誠におかしなものである。先年東京の国立劇場で、叡山の職衆と宮内庁の楽師によつて、この三十二相が公開せられたのであるが、私は見聞しなかつたので何とも言えない

が、色々と話題を呼んでいる様に聞いていて、再度公開する様子らしい。打毬楽とは祇園精舎落慶の時、歌唄に応じて妙音天の奏じたものを伝えたといつているが、歌唄は元来は梵音である。この梵唄を文句だけ翻訳して漢語とし、この漢語にもとの梵唄音を附けたものらしいので、そこに感覚のずれがあると思う。三十二相に合奏する打毬楽は黄鐘調で延只八拍子という異例の楽であるので、世間では殆んど用がないので、自然煙滅した形になつて、遠い昔の音楽となつて仕舞つたのである。そこで私は色々と苦心の結果三十二相考なる小論を刊行して公表したのであるから、多少は世のためになつたと思つているが、残念なことには既に絶版となつて仕舞つた。只拍子の楽は大略臨邑楽であつて、四拍子物に抜頭・輪鼓・陪臚等があり、八拍子に還城楽・西王楽・柳花園・蘇莫者等があるが、打毬楽は早只八拍子の上に延只八拍子というがある。今はこの、延只八拍子である。急は鳥急で之は普通の早八拍子で問題はない。鳥というは迦陵頻のことである。同朋大学での学会でこの三十二相を語つたら姫路の水原夢江さんが来ておられて、思はず話に花が咲いた。

三　神楽と懺法

神楽は古来日本固有のもので宮中で行はれるものであるが、この神楽に懺法の一部が歌はれるので、之は意外であると思う。神楽は先づ庭燎で始まつて徹宵行はれ、夜明になつて明星の歌となる。この明星の歌は本と未とで歌うもので、元来仮名書きになつているから、その読み方が非常にむつかしいと思はれるが、之を漢字交りで書けばよく解る。それでいま漢字で書けば、白衆等聴説晨偈朝とあるので、これが法華懺法にある晨朝偈である。神楽では晨朝偈の偈文は歌はないが、兎も角この神楽歌に仏教のしかも有名な懺法の語が歌はれるというのは、この一つである。この明星が歌はれる様になつたのは、何時頃からかは、興味深い問題であるが、これは容易に決定しにくいものと思う。この清浄偈は古くは信行の十方仏名経に出ているので、引いては善導大師の往生礼讃の平旦偈に摩訶僧祇律と註してある。

四　偈頌

これは石清水八幡宮の修正会に行はれたものであるが、法華経普門品の世尊偈の声明に雅楽を合奏したもので、頌という楽曲があるのではなく、いわば声明の附物である。神仏分離已後たえて行はれぬのであるが、昔は盛大に行はれたものである。これは本地垂迹の説によつて行はれたものである。独立した楽曲でないから雅楽の曲としては譜本にはないのであるが、附物の楽として、その声明の譜に書かれているので、今日その大要を察知することが出来る。躰源鈔には偈

文に横笛の楽譜が附けられているが、私の所持本は肉筆本ではなく活版本であるから、その校正者が素人らしいので是の譜を見ても、とても了解が出来ない。私は苦心してどうにか之をものにして見たのであるが、実際に之を合奏する機会がない。雲雷鼓掣電の句から是故応頂礼の偈まで十一句と願以此功徳を加えて都合十二句まで合奏するので、総体に於て三回繰返えされて延四拍子ものである。三管三鼓に糸物を加えると、伶人だけでも相当の人数がいり職衆を加えると中々の大法会である。昔は石清水八幡宮の威力によつて盛大な修正会が行はれたもので、左のオホタヒメ神の本地が観音であるから、この世尊偈の声明が行はれたのである。教訓抄には平調物で三度拍子に打つとしてある。また稽首八幡とて大菩薩をほめたてまつる頌があるが、之れは狛笛にて附ける雙調物であるが、この声明の譜本はまだ私の手には入つていない。却説　世尊偈の声明は先づ楽から始つて声明が途中から附ける様になつているのが常法と異つている。常法は先づ声明から始めて途中から楽が附くので、茲に世尊偈声明の特徴がうかがわれる。

五　和讃と越天楽

茲に和讃と言うは真宗大谷派に伝はる和讃を指すのである。和讃には初重・二重・三重の区別があるが、二重三重の節譜の構成が私は雅楽の越天楽の影響があるものと見ている。特に二重の例えば解脱の光輪の二行目の光触の節、三重の中二行の終りの節などは、慥に越天楽から来ていると思はれる。越天楽には平調・黄鐘・盤渉の三調子あるが、その粋を集めとつて和讃の節が出来たと思はれるが、精しい考証は後日にゆづる。

六　伽陀と附物

伽陀には大概附物がある。附物というのは伽陀の声明の通りに笙・ひちりき・笛の三管を附けるのである。天台宗では伽陀の間、声明と無関係に楽を奏するのが附物だと聞いているが、大谷派では伽陀の後二行に声明の通りに楽を附けるのである。だから附物をする人は声明に堪能でなければならないと同じく、声明をする人は附物の音律に合する力がなければならぬので非常に難物であると思う。私は若年の頃から附物をしているが、声明も長年専心的に研究している。それで私の思う様に声明をして呉れないし、私の考えている様に附物をしてくれる仁も少ない。地方え行くと声明を全々知らない人が、附物の譜を教えて呉れとせがまれるが、私は断然ことわつている。願はくはさきの三十二相や偈頌の様に、声楽一体となり、管声一如の世界を実現したい。